

“一 A 就 B”の形式の意味と用法の意味

中根 綾子*

1. はじめに

現代中国語における複文の一つに数えられる“一 A 就 B”（以下、“一 A 便 B”も含めて用いる）形式について、島津 2004、島津 2006、島津 2011、島津 2013a という一連の研究（以下、まとめて提示する場合は「島津論文」という）がある。島津論文では、“一 A 就 B”の構文の意味、非プロトタイプ形式への意味拡張、述詞に前置される“一”の意味機能、当該形式における“就”の意味機能など、“一 A 就 B”形式を巡るさまざまな問題について詳細な考察が重ねられ、当該形式を統一的に論じた研究としても、また複文研究という観点から見ても、大きな成果を挙げていると言っても過言ではないだろう¹⁾。

本稿は、島津論文を振り返るとともに、その成果を基にさらに“一 A 就 B”形式を別の観点から説明する可能性について試論するものである。はじめに島津論文を概観し、その主張を踏まえた上で再度島津論文が考察の出発点とする呂叔湘主編 1980 の主張に立ちかえり、改めて認知言語学の観点から“一 A 就 B”形式の構文の意味と各用法に表れる表現効果を考える。本稿の考察対象は、次の (1) (2) に記す、呂叔湘主編 2002:599 の提示する“一 A 就 B”の二つの用法のうちの (1) とする。以下に島津 2013a:141 から引用する。

- (1) 前後二つの動詞が異なり、ある動作や状況が出現した後引き続いて別の動作や状況が起ることを表す。主語は同一でもよいし、

* なかね・あやこ 横浜国立大学非常勤講師

二つの主語に分かれてもよい。

①一请就来。(招くとやって来る。)

②他一解释我就懂了。(彼が説明すると私はすぐに分かった。)

(2) 前後二つの動詞が同じで、主語も同じである。動作がいったん起るとある程度に達するかある結果を得る。後ろの動詞は省略されたり、‘是’で置き換えられたりすることが多い。

③我们在西安一住就住了十年。

(私たちは西安に住み出すと瞬く間に10年経った。)

④一讲就是两个小时。(話し出すと2時間にもなった。)

2. 島津論文の概観

2.1 島津 2004

島津 2004 は、“一 A 就 B” とときにそれと交替可能な“刚 A 就 B” を比較対照することにより、各々の構文の本質的な意味の違いを明らかにしたものである。まずは“一 A 就 B” から、中核の意味（「出来事継起型」）と周辺の意味（「意味拡張型」）の二つに分類する。両者の弁別方法を「[2つの出来事の継起]と捉えられやすいか否か」とし、意味的な観点から分類した点が、形式的特徴によって分類した呂叔湘主編 1980 と異なる点である。上記 (1) の一部は中核の意味であり、(1) の一部および (2) は周辺の意味に含まれる。中核の意味の例 (3) (4) および周辺の意味でかつ (2) とは異なる例 (5) (6) を島津 2004 から抜粋しておく。

(3) “对！”邢元一抬下巴就喊起来，“还有一把钥匙呢，跑哪儿去了？”

(4) 周平一躲，杜洪远就一头撞到了车床上，脑袋撞开了一个大口子。

(5) 车间主任一开始就表情不自然，讲话讲到离奖金十万八千里的计划生育上去了。

(6) 杨清民摇摇头：不行，你一动手，这事情就麻烦了。

“一 A 就 B”の構文の意味は、呂叔湘主編 1980 を言い換え「2つの出来事がごく短い時間間隔をおいて継起する」と定義し、そのような意味は動量を表す“一”の持つ「事象のごく開始部分に焦点をあてて最小量を取り出す」という意味機能によると論じた。そして“一 A 就 B”の中核的意味は、「2つの出来事の継起」と捉えられなくなるに従い周辺的意味に拡張していくと説明した。

次に“剛 A 就 B”について、その構文の意味を呂叔湘主編 1980 に基づき「事態 B が起るほんの少し前に事態 A が起った」と規定した上で、“剛 A 就 B”は「時間軸上で A、B それぞれの出来事時点が近接し、かつ、発話時より左側に位置することを述べるための構文」であるとした。

“剛 A 就 B”と“一 A 就 B”の各々の成立要件について、意味の面では、“剛 A 就 B”は二つの事態は偶然継起した出来事であって時間の近接性という要件さえ満たせば成立する一方、“一 A 就 B”は時間の近接性だけではなく二つの事態の「内在的関連性」が見られる場合が多く、その場合には“剛 A 就 B”に変換することはできないと説明した。両形式は時間の近接性という点では意味が重なるが、本質的には“剛 A 就 B”は事態 AB の時間軸上の定位を目的とし、“一 A 就 B”は時間軸からは自由であって事態 AB の相互関係にのみ着目する、という点で異なるとし、「内在的関連性」というキーワードを軸にしたこの主張は、先行研究にはない新たな視点を提示したものとして特筆すべきである。

2.2 島津 2006

島津 2006 は、島津 2004 における“一 A 就 B”の「出来事継起型」と「意味拡張型」という二つの分類を基に、“一”の意味機能を再検討し、さらに先行研究では深く論じられてこなかった“就”の当該形式における意味機能、そして“一”および“就”と「内在的関連性」との関係、当該形式が多様に意味拡張する背景について論じたものである。

まず“一”について、動詞または形容詞の前という文法位置を理由に、先行研究の言うような動量表現ではなく、連用修飾成分と同等に機能していると指摘した。そして、“一”の意味機能を島津 2004 から一歩進んで、「動作や状態がひとたび現れるという起り方で起る」とし、アスペクト的には「変化」を表すとした。さらに“就”の意味機能について、上記(1)の“就”は「すぐに」という時間副詞、(2)の“就”は語気副詞であるという一般論を述べた後、(1)の“就”全てが「すぐに」という意味を表すわけではないこと、「すぐに」を表す“立即”“立刻”などの副詞と共起することから、この“就”は「すぐに」ではなく、(1)(2)の“就”ともに「排他的限定」を表し、「すぐに」という意味は文脈からの語用論的意味であるとした。以上の考察から、“一A就B”の構文的意味を島津 2004 から修正し、「Aがひとたび起ると(排他的に)Bが起る(起った)」と規定した。

そして、島津 2004 で言及した“一A就B”が「内在的関連性」を成立要件に持つことの理由を、“一”および“就”の意味機能に求め、“一A就B”では“一”の表す「ことがらの生起」という側面から事態Bへの「限定」がなされるため、事態ABの間に「内在的関連性」が生じると説明した。「内在的関連性」は特に恒常的事態および未然事態の叙述で顕在化するという。それぞれ例を一つずつ引用しておく。

(7) 他有个习惯，脑子一累就想听音乐。

(8) 您回家休息去吧，我带几个人在这儿盯着，一有情况就通知您。

続いて「意味拡張型」が多様性をもつ理由について、“一A”は複文の従属節という以前に形式として背景化し易く、また“一A就B”が已然の事態を表す場合、事態Bは「話し手の観察結果」の叙述である、という二つの点を挙げた。

(9) 两个女人一看到马锐大热天戴了顶帽子就起了疑，揭下来一看，发现了那个伤口。

(10) 先前她在床上呆着从不说什么，这么一来她可就难受了，腰也酸了背也疼了，怎么都不舒服。

(11) 河湾的回流上映着朦胧的月色，苇子丛里蚊子搅成团，手在脸上一抹就是一手血。

(9) (10) の“一 A”は背景化した結果「出来事」ではなく、(9) は「誘因」、(10) は「ある状態」を表し、(11) の事態 B は「話し手の観察結果」の叙述であると説明している。

2.3 島津 2011

“一 A 就 B”における“一”について、島津 2004、島津 2006 と論考を重ねてきたが、島津 2011 は、“一 A 就 B”に限らず広く述詞性の語句の前に置かれる“一”について、その意味機能およびなぜ当該意味を表すものとして“一”が用いられるのかを論じたものである。ここで考察の対象となっているのは、以下のような用法である。

(12) “往哪个方向？”“北边。”堂房弟弟手一指。

(13) 来人把花儿放在地上，直起腰。他看了不由得一怔，来人竟不是老范。

(14) 她不答应，挂着树枝往屋外走，我抓住她的胳膊一拉，她身体就往地上倒。

同文はこの“一”の解釈について、従来短い動作あるいは短い時量という「量」を表しアスペクトとして機能すると説明され、また先行研究は概ねこの前提の中で議論されているとまとめた上で²⁾、この先行研究の見方に対し懐疑的な立場をとっている。そして、“一 V”が“这”の修飾を受けることを理由に、“一”が量詞の個体化機能に類する、事象の「個別化機能」を担うという新たな主張を展開した。そして、事象が個別化されるということは事象の「存在」を意味し、それは「一つ」を意味する“一”で表されることで、事柄が「一つある」という意味を表すことに

なると説く。同文から“一 V”の用例を一つ挙げておく。

- (15) 有一回，打麻将时，灯从上照下来，脸上罩了些暗影，她的眼睛在暗影里亮着，有一些幽深的意思，忽然她一扬眉，笑了，将面前的牌推倒。这一笑使他想起一个人来，那就是三十年代电影明星阮玲玉。

以上の議論を経て、“一”の意味機能について島津 2004、島津 2006 を修正し、「事柄の存在を主張するものであり、「事柄の生起」を意味する」と規定し、その裏付けとして“一”が未然相を表す“要”と共起できないことを挙げた。また、“一”は已然の事態を表すため、その後接部には已然の事態でありさえすれば形容詞等で表される事態でも“了”や“着”、開始相“起来”の共起する事態でもよいとする。さらに、已然を表す“一 V”が未然を表す条件文の前節となることが多いという事実については、「基準時において未だ起っていない事柄を已然の形で表現することによってその事柄を仮定条件として提示し、後節がその帰結として読まれ」るのであると説明した。

2.4 島津 2013a

島津 2013a は、島津 2004、島津 2006 に続いて、再度“一 A 就 B”の構文的意味（プロトタイプの意味（同 2004 では「出来事継起型」））を議論し、それに基づき非プロトタイプの意味（同 2004 では「意味拡張型」）が生じるメカニズムを明らかにし、“一 A 就 B”構文全体を統一的に論じたものである。加えて、“一 A 就 B”を特徴づける事態 AB 間の「内在的関連性」の問題を再度取り上げ、これまでは「ある」というのみで具体的な説明には至らなかったが、同文はこの問題に対し一定の説明を与えた点が注目される。

はじめに、“一 A 就 B”は構文的意味に二つの事態間の時間上の近接性だけでなく「内在的関連性」を含むことを再確認した上で、“一 A 就 B”

がなぜこの意味を持つのかという問題を具体的なコーパス例を複数用いて検討し、「内在的関連性」の存在は「二つの事態の連鎖的な継起をいわば誘発する背景要因の存在に支えられている」と説明した（具体的には本稿「3. 問題提起」を参照されたい）。これを踏まえ、“一 A 就 B”の構文的意味を「(何らかの背景要因が存在するために) 事態 A が起ると連鎖的に事態 B が起る」と再規定した。

このように、プロトタイプの意味の文は個別具体的な事態の叙述では「背景要因」を基盤とする「内在的関連性」を持つ二つの事態の連鎖的継起を叙述するものだが、恒常的な事態の叙述になると、「背景要因」は出来事ではなく人や事物の属性となり、事態が個別具体性を欠くことで、事態の連鎖的継起を表すことを主眼とするのではなく、当該「背景要因」を裏付ける根拠としての役割を担うようになると説明する³⁾。そしてそれは非プロトタイプの意味の文に継承され、プロトタイプの意味の文ではまさに背景であった「背景要因」が前景化することで、文の主眼が事態の連鎖的継起の叙述から「背景要因」自体の叙述に移行するという、いわば「叙述の主眼の転換に動機付けられ」ることによって、“一 A 就 B”はプロトタイプの意味の文から非プロトタイプの意味の文へと意味拡張していると論じた。具体的には、上記(11)について、「背景要因」である「葦の草むらが塊となるほど蚊の多い場所だ」という叙述に続いて、“一 A 就 B”を用いて「手で顔をぬぐってみると手のひらが血で染まる」と述べることで、“一 A 就 B”は「背景要因」を裏付ける根拠として働き、ここでの叙述の主眼は「葦の草むらが塊となるほど蚊の多い場所だ」ということにあると説明する。

3. 問題提起

鳥津論文を通じて俎上に載せられてきた議論の一つに「内在的関連性」

の問題がある。島津論文は呂叔湘主编 1980 では取り上げられていないこの点に着目し、邢福义 2001:271-272 による、“没想到，他们刚一回去，老队长就被揪了出来。”（彼らが帰ったとたんにベテランの隊長が捕まるなんて思いもしなかった。）の事態 AB 間には「何らかの内在的関連性が生じるようだ」（島津 2013a:143-144）という指摘を引用し、母語話者が“一 A 就 B”に対して持つこのような感覚について合理的な説明を与えるべく議論を重ねてきた。

「何らかの内在的関連性」とは具体的には何を指すのだろうか。島津 2004 から確認する。

(16) “你一张嘴我就恶心，浑身起鸡皮疙瘩……” [同 :149]

（「あなたが口を開くと私気持ちが悪くなって、全身鳥肌が立つのよ…」）

(17) 感情一冲动就容易坏事。 [同 :150]

（かっとなると事をし損じ易くなる。）

同 :149-150 は (16) は条件文、(17) は恒常的条件を表す文とし、いずれも <条件> という「内在的関連性」を持つと説明する。<条件>とは、「ある事態が別のもう一つの事態を引き起こす原因となるという因果関係のうち、仮定的な因果関係を表す場合」（『日本語文法事典』:300）であり、(16) (17) は観念世界における事態の叙述であると考えてよいだろう。

(18) 心里一有杂念，手就颤抖了，最后的缝合远不如从前那么整齐漂亮。

[同 :151]

（心に雑念が生じると、手が震えた。最後の縫合はかつてのあの整ってきれいなものとは程遠かった。）

(19) “她一下班就出去了，会不会去她姨家了？” [同 :138]

（「彼女は仕事がひけると出てったよ。叔母さんの家にでも行ったのかな？」）

(20) “对！”邢元一抬下巴就喊起来，“还有一把钥匙呢，跑哪儿去了？”

(= (3)) [同 :137]

「そうだ！」邢元は顎を上げると叫び始めた。「もう一つの鍵は？
どこに行っちゃったんだろう？」

(18) (19) (20) は (16) (17) とは異なり、事実界における既実現の事態の叙述である。(18) については、同 :151 は「A の主体の心理活動が引き起こした A の主体の身体的反応」という、いわば<因果>を表すような「内在的関連性」を指摘する。一方、(19) (20) は特に説明のない例であるが、本稿の見る限り、(19) は「仕事がひける」と「出ていった」との間には (18) のような因果関係があるかという、速やかに肯定はできず、(20) に至っては「顎を上げる」と「叫び始めた」の間には継起関係があるのみで、因果関係は感じられない。

以上の言語事実から、二つの問題点が浮かび上がってくる。一つは、「内在的関連性」の内実は果たして何かということである。島津 2004 は観念世界事態の表す<条件>と事実界既実現事態の表す<因果>を挙げたが、これらのことなのか、それとも他にもあるのか。さらにもう一つは、(19) (20) のような例は「内在的関連性」があると言えるのかということである。

この問題に対し、島津 2013a:144 は“一 A 就 B”の全ての例に「時間的近接性」と「内在的関連性」の存在を認め、“一 A 就 B”の成立要件を「時間的近接性」と「内在的関連性」があることとした。そして、「内在的関連性」を「2つの事態の間に何らかの繋がりがあある」という意味とし、「内在的関連性」は「2つの事態の連鎖的な継起をいわば誘発する背景要因の存在に支えられている」と説明した。同文は「内在的関連性」の存在の証明として、構文という枠内だけではなくテキストにまで考察範囲を広げることにより、上記 (19) (20) のように一見「内在的関連性」を見いだせない用例に関しても、テキストの示唆する「背景要因」があることによって生じる個別の「内在的関連性」を以って事態 B は必然的に生起しているのだと解釈したのである。

しかし、同文がその証明に使用した用例を再度検討してみると、その論理が上手く説明できないことがわかる。

(21) [?]我回头一看就吓了一大跳。

同 :147 は、(21) が不自然となるのは「通常この2つの事態の出現の背景に何らかの要因を想定しないことに起因する」と述べ、続いて、Aに同じく“看”が用いられ(21)と類似の意味を表す(22)を提示し、この場合は「背景要因」があるため問題なく成立しているとした。

(22) 吕建国想问问是不是教育局不想接收了,这没问呢,就听到门一响,有人进来了。他回头一看,心就乱了,什么话都没了,忙说行行,转身笑道:“杨大姐你坐。”

(吕建国は教育局が工場を接收したくないと考えているのかどうか聞きたかったがまだ聞いていなかったところ、ドアが音をたて、誰かが入って来たのが聞こえた。彼は振り返って一目見ると、心が乱れ、何も言えず、慌てて(電話の相手に)わかったと言い、向きなおって微笑んで言った。「楊さんお座り下さい。」)[同 :147]

(22) はテキストから呂工場長が日頃から楊さんを恐れているという「背景要因」があることがわかり、そのため、呂工場長が「(振り返って)見る」という事態に続いて「(恐れている楊さんがいたため)心が乱れた」という事態が必然的な帰結として起こったということである。もし同文の言うように「背景要因」があれば成立するのであるならば、(21)は(22)の文脈に入れて「背景要因」を疑似的に与えれば成立するはずである。しかし、(23)のように「背景要因」を与えたとしても、単独で使用するより許容度は高くなるということがあったとしても、(22)と同等の自然な表現となることはない。

(23) 吕建国想问问是不是教育局不想接收了,这没问呢,就听到门一响,有人进来了。[?]他回头一看就吓了一大跳,什么话都没了,忙说行行,转身笑道:“杨大姐你坐。”

（文脈に合わせて主語は変更している）

このことから、(21) が成立しない理由は「背景要因」の欠如に求められるものではないということがわかるだろう。文がテキスト内に置かれることにより個別の表現効果を持つということはあり得るが、同文は“一 A 就 B”を「構文」である（同:143）と宣言したにもかかわらず、構文成立の根拠を形式の側ではなくテキストの側に求めてしまった。しかし本稿は、“一 A 就 B”は構文である以上、構文成立の根拠は構文のもつ原理の内にあるのではないかという見地に立ち、「内在的関連性」について新たな説明の可能性を模索したい。

本稿は“一 A 就 B”が事実界既実現の事態を表す用法と観念世界の事態を表す用法、すなわち現実領域と非現実領域⁴⁾ という時間的性質の異なる二つの用法を併せ持つという点に着目する。典型的な条件文である“如果 A 就 B”が<条件>を表す専用の形式であり非現実領域の叙述に用いられるということ、さらに“剛 A 就 B”が已然の事態（島津 2004:152）という現実領域の叙述に用いられることと照らし合わせると、“一 A 就 B”が現実領域と非現実領域の二つの用法を同時に持つという事実は特徴的であり、異なる時間性を持つ二つの用法を整合性をもって統一的に説明することが求められるだろう。

次章から、“一 A 就 B”を「現実領域における用法」と「非現実領域における用法」の二つに分類し、各用法がどのような意味を表しているのか、「内在的関連性」とは何か、を考える。この考察を通じて、二つの用法の意味がどのような論理で“一 A 就 B”という一つの形式により表現されているのかを論じ、“一 A 就 B”形式が表す本質的な意味を問う。

4. 考察

“一 A 就 B”は、呂叔湘主編 2002 他先行研究が主張してきたように、本稿も<継起>を表すと考え、仮に「事態 A が生起すると事態 B が生起する」という意味を表すと規定する。事態 A の生起が時間的に前、事態 B の生起が時間的に後ろという時間的な位置関係、および二つの事態の時間的位置が近接していることを述べるものである。事態 A と事態 B は（個別具体的な）時間軸上に定位されるものではない（島津 2004）という点が本形式の特徴である。時間的に前にある事態 A が生起しないと後ろにある事態 B の継起は成り立たないので、事態 A は時間軸における<已然>という意味とは別に「生起している」ことが前提である。

以下、用法を分類し意味を整理する。本稿の分類は島津論文の「出来事継起型」と「意味拡張型」という分類とは異なり、呂叔湘主編 2002 に立ち返り“一 A 就 B”を上記 (1) (2) に分け、(1) をさらに「現実領域における用法」と「非現実領域における用法」の二つに分ける⁵⁾。用法の全体像を以下に示す。

- | | | |
|---------------------------|----|---------|
| (24) 「現実領域における用法」——事実界既実現 | { | <継起> |
| | } | <習慣・傾向> |
| 「非現実領域における用法」——観念世界 | —— | <条件> |

4.1 現実領域における用法——事実界既実現<継起>

現実領域事実界における個別具体的で一回の既実現の継起事態を述べる用法である。「事態 A が生起すると（すぐに）事態 B が生起した」という既実現事態の<継起>を表す。“一 A 就 B”自体は二つの事態の時間的な位置関係の近接を示すだけであるが、時間軸を持つ現実領域で用いられると具体的な時間性を帯びるため、「すぐに」という意味合いが感じられる。以下、呂叔湘主編 2002 の指摘に倣い、事態 A と事態 B の主語

が同一のタイプと異なるタイプに分けて考える。

4.1.1 主語が同一のタイプ

(25) 他们慢慢地走着，一边走一边说话，正走过花台旁边，忽然听见一声不寻常的哀叫，于是一个黑影往假山上面一纵就过去了，再一跳就到了回廊的瓦上，吓得淑贞连忙往鸣凤的身上偎，淑华惊讶地接连问：“什么东西？” [家：巴金]

（皆ゆっくりと歩いていた。歩きながら話をしていると、ちょうど花壇の横を通り過ぎた時、突然尋常でない悲鳴が聞こえた。そして、黒い影が築山の上に向かって跳び上がると向こうへ行き、また跳ぶと回廊の瓦の上を下りたので、あまりにも驚いて淑貞は慌てて鳴鳳の体にしがみつき、淑華は驚いて続けざまに「何？」と聞いた。）

(26) 敢死队出发了；男孩子猫跃般一个接一个从门里扑出来，一接地便立即匍匐前进，呈扇面向李阿姨床铺摸去。[看上去很美：王朔]

（決死隊は出発した。男の子達は猫が跳ねるかのように一人また一人とドアから躍り出てくると、床に体を近づけるなりすぐに匍匐前進し、扇面を呈して李先生のベッドに向かって手探りで行った。）

(25) “一纵就过去了”は黒い影が「跳び上がる」という事態が起こるとすぐに「向こうへ行った」という事態が起こった、“一跳就到了回廊的瓦上”は「跳ぶ」という事態が起こるとすぐに「回廊の瓦の上を下りた」という事態が起こったという<継起>を表し、事態 A と事態 B は時間軸上の位置が緊密で、一続きの事態とみなすことができる。(26) も同様で、仮に“立即”がなくとも一続きの継起事態を述べていることに変わりはない。事態 A と事態 B の時間上の位置関係はまさに面と面を接しており、二つの事態はほぼ一体化してあるということを確認しておく。

“一A就B”は「事態Aが生起すると事態Bが生起する」という意味を表すことから分かるように、個体を中心とした捉え方ではなく、事態全体を中心として捉えた〈事態生起〉の表現である⁶⁾。そして“一A就B”の〈事態生起〉という事態把握によって表現される内容は、話し手（以下、物語の語り手（書き手）も含めて用いる）の視点から捉えた話し手の観察に基づくものである。

(27) 但是他一转身就不见了，只听见他在上面唱京戏，声音愈来愈小，后来就听不见了。 [家]

（しかし彼はまたたく間にいなくなり、上で京劇を歌うのが聞こえるだけで、声は次第に小さくなり、その後聞こえなくなった。）

(28) “怎么？”关厂长的声音一出来就带着气，“干部一直也比你们忙！” [島津 2004:141]⁷⁾

（「何？」関工場長の声はいきなり怒っている。「幹部もずっとお前たちより忙しいんだよ！」）

(27) の事態B「いなくなった」というのは、まさに話し手の視点からの〈事態生起〉の叙述に他ならない。(28) は主語は動作者ではなく「関工場長の声」という対象について、話し手の観察に基づいて「怒りを帯びている」と描写している。

(29) 特别听不得活得不耐烦的老头老太太胡说一些毁人不倦的话，一听那过来多少年大仙般的口气就想喝斥：装？又装！[看上去很美]（特にいやいや生きているじいさんばあさんが飽きずに人の邪魔でもするような話をでたらめに言っているのが聞くに堪えず、あの何年も生きてきた大仙人のような口ぶりを聞くと、大声で「ぶって？またぶってるだろう！」と責めなくなった。）

(29) の事態Bで用いられている助動詞“想”は本来「したい」という動作者の〈願望〉を表すが、“一A就B”で用いられると話し手の視点からの〈事態生起〉の表現となるため、動作者中心の「したい」という〈願

望>の意味ではなく、事態全体を中心として捉えた「したいという状態になった」という<変化>の意味で読まれる⁸⁾。

ここまで、“一A就B”は話し手が観察した事実として事態Aと事態Bが時間上一続きに継起したことを述べるもので、事態全体を中心とした捉え方による<事態生起>の表現であることを確認した。だが、さらに用例を観察していくと、事態ABの時間的位置の近接を意味する“一A就B”で表現しながら、事実としては事態ABが時間上近接した一続きの事態ではないものがしばしば見られる。

(30) 一毕业，左滕就到前线部队结婚去了。

(卒業すると、左滕は前線部隊に結婚しに行った。)

[島津 2011:205]

(31) 本来嘛，他们车间里的工人没几个高中生。他说他一进厂，没几天就能看图纸，这没什么稀奇的。 [有只鸽子叫红唇儿：高行健]
(それはそうだろう、彼らの工場の労働者には高校生は何人もいない。彼は、自分は工場に入って何日も経たないうちに製図を見られるようになったが、こんなこと何も珍しいことではないと言った。)

(30) は「卒業する」とすぐに「前線部隊に結婚しに行った」という意味だが、実際のところ卒業後多少時間が経過していることもあり得、また二つの事態の間に別の事態、例えば「知人に挨拶に行く」、「結婚する準備をする」等の事態が生起していてもおかしくない。しかしここでは、「卒業する」という事態の生起に関連して、その後に関わり話し手が知り得た出来事の中で、話し手が「前線部隊に結婚しに行った」という事態に注目し、相対的に話し手の注意が向けられていない事態はいわば話し手にとっては生起していないも同然に扱われ、「卒業する」事態と「前線部隊に結婚しに行った」事態が話し手にとって時間的に近接して生起したと捉えられて、まるで一続きの事態のように“一A就B”を用いて表現さ

れている。(31)は“没几天”により事実としては事態 AB は一続きではないことがわかるが、話し手が事態 B に注目し、事態 AB は話し手にとっての一続きの事態として表現されている。

次は反対に、事実としては二つの事態が継起しているのに“一 A 就 B”が用いられていない例である。

(32) 她把眼光往讲台上一扫，看见那个国文教员正背转身子在黑板上写字，便把嘴放在琴的耳边低声说：“蕴华，也许我的话说得过火。

[家]

(彼女は視線を教壇の上に走らせると、その国語教員がちょうど背を向けて黒板に字を書いているのが見えたので、琴の耳元に口を寄せて低い声で言った。「蕴華、もしかしたら私の話は行き過ぎているかもしれない。)

恐らく事実は、「(視線を) 走らせる」という事態に引き続いて「その国語教員がちょうど背を向けて黒板に字を書いているのが見えた」という事態が生じたのであろう。しかし、“就”は“看见那个国文教员正背转身子在黑板上写字”の前には用いられていない。事実としては二つの事態の継起であっても、言語化する際に話し手はそれを全て“一 A 就 B”を用いて表現するわけではない。事実としての継起事態を“一 A 就 B”を用いて表現する場合もあれば、用いずに表現する場合もあるのはなぜだろうか。(32)の「その国語教員がちょうど背を向けて黒板に字を書いているのが見えた」という事態は、恐らく場面において話し手が注目している事態ではないと考えられる。付け加えておこならば、この場面で話し手が注目しているのは、“便”があることから、さらに後ろにある「琴の耳元に口を寄せて低い声で言った」ということおよびそのセリフの内容であることがわかる。“一 A 就 B”を用いて表現しようという動機づけ、それは話し手が「(事態 A に関連して) 事態 B が生じた」ということに注目し、事態 A に事態 B を結びつけるということにある。(32)が“一

A 就 B”を用いないのは、そのような動機づけがないからであって、仮に話し手が「その国語教員がちょうど背を向けて黒板に字を書いているのが見えた」という事態に注目するならば、(33) のような文を作ることでもできるわけである。

(33) 她把眼光往讲台上一扫，就看见那个国文教员正背转身子在黑板上写字。

話し手が事態 B の生起に注目しているということ、テキスト全体の意味を考えながら再度観察する。次の例は島津 2013a:150-151 において「背景要因」の存在を証明するために議論されたものであるが、ここではそれとは違う角度から検討する。

(34) 于是我跟着他走进教室，看着他从书包里拿出药箱，打开瓶盖取出药片，放入嘴中一仰头就咽了下去。就那么干巴巴地咽下去，他都不需要水的帮助。

（そこで私は彼の後について教室へ入り、彼がカバンの中から薬箱を取り出して瓶のふたを開けて薬を取り出し、口に放り込んでくっと上を向くと飲み込んだのを見た。そうやって水の助けも必要としないでカラカラのまま飲み込んだのだ。） [同 :150]

(34) は 8 歳の子供が薬を飲む場面を描写したものであるが、単に薬を飲むまでの一連の動作行為を述べたものではなく、水も何も使わずにカラカラのまま薬を飲むということは大人でも難儀することなのに、たった 8 歳の子供が「(上を向くとすぐに) 飲み込んでしまった」ということを述べているのである。もしこれを“一 A 就 B”を用いず、“放入嘴中，仰头咽了下去”（口に放り込んで、くっと上を向いて飲み込んだ）と表現すれば、3つの動作行為が等価に並列する表現となり、継起事態を表すとはいえ意味合いは異なってくる。“一 A 就 B”は意味上事態 A と事態 B が等価に並列しているわけではなく、事態 B の生起に重点が置かれ⁹⁾、“一 A 就 B”が従属節と主節から成る複文であるというのもまさにそういうこ

とであると考えられる。

以上の考察から、“一A就B”は、事態Aの生起に関連して話し手が自身の注目しているあるいは話し手にとって意味のあると考える事態Bの生起を事態Aに結びつけるという、話し手による認知の営みによって動機づけられた(池上2007)形式であると言っていることができるだろう。上記(20)についても、一見、事実としての事態ABの継起を述べているだけのようだが、背後には話し手が「(顎を上げるとすぐに)叫び始めた」ということ、さらにはそのセリフの内容に注目しているという認知的営みが存在しているのである。

次に、事態Bが元の状態が変化するあるいは心理上の変化を表す用例を観察する。この場合、<継起>を表すと同時に、事態Aには事態Bが生起する<契機>の意味合いが感じられる。

- (35) 我们二十个人，轮流每两个人做一天饭，都叫苦连天，手艺本来不济，被众婆姨一指点就更乱了套路，昏天黑地。

[插队的故事：史铁生]

(私たち二十人は代わる代わる二人で一日の食事を作ったが、皆立て続けに悲鳴を上げた。料理の腕は元々下手くそだったので、おばさん達に教えてもらおうと更にめちゃくちゃになって、もう大変だった。)

- (36) 我沿楼梯一级级上了二楼，推开中班的门，径直走到陈南燕的床边，熟练地爬上她的床，掀开被子钻进去。一碰到那具温润的身体，闻到熟悉的被窝味儿，我就感到放心，有了仰仗，就那么傍着她一头睡了。

[看上去很美]

(階段を一段一段上がって二階に行った。年中クラスのドアを開けてまっすぐに陳南燕のベッドの脇に歩いていくと慣れた手つきで彼女のベッドによじ上り、布団をめくって潜り込んだ。その暖かい体に触れいつもの布団の匂いを嗅ぐと安心して、頼りを得た

ところで彼女に頭をくっつけたまま眠った。）

話し手が事態 A に関連して事態 B が生じたことに注目し、両事態の生起が結びつけられて、二つの事態の時間的近接を表す“一 A 就 B”を用いて「事態 A が起こると（すぐに）事態 B とな^らった」と述べれば、時間的に前にある事態 A は<契機>という意味合いを帯びるわけである。

これまでの議論に基づき、上で検討した (21) について再度考察してみよう¹⁰⁾。

(37) ?我回头一看就吓了一大跳。(= (21))

なぜ本例が成立しないのか。それは、事態 A の「(振り返って) 見る」が事態全体中心の捉え方ではなく個体中心の捉え方による叙述であり、それに伴い事態 B の「心底驚いた」も動作者側から表現された内容であって、話し手によって観察された描写ではないからだと思われる。場面を伴う別の用例で確認する。

(38) 这时突然听身后有人叫：“陈信。”回头一看，见是一个三十几岁的年轻女人，手里牵着一个很白很好看的男孩子。

[本次列车终点：王安忆]

(このとき突然後ろから誰かが叫んでいるのが聞こえた。「陳信。」振り返って見ると、三十幾つかの若い女性で、色白で可愛い男の子を連れているのが見えた。)

(38) からわかるように、“回头一看”は、突然自分の名前を呼ばれた陳信が、誰だろうと確認するために動作者としての意志を持って「振り返って見る」という動作を行う、動作者中心の捉え方を表している。“见是一个三十几岁的年轻女人，……”も、動作者である陳信側から見た内容を述べているのであって、話し手による観察内容を描いているのではない。したがって、ここでは“一 A 就 B”が使われていないと考えられる。

では (37) を成立させるためにはどうしたらよいか。次の (39) のように“一 A 就 B”を用いないか、あるいは意味内容は変わってしまうが、

(40) ように主語を“我”とせず、“那”などのダイクティックな表現を加えて話し手の視点を投入し事態全体中心の捉え方に変更すれば成立し易くなる。

(39) 我回头一看,吓了一大跳。(私は振り返って見ると、心底驚いた。)

(40) 他一看到那条蛇就吓了一大跳。

(彼はその蛇を見るなり大変驚いた。)

逆に動作者中心の捉え方に傾く動作者の意志を表す成分 ((42) “故意”) を加えると、“一A就B”は成立しにくくなる。

(41) 小王一生气就把遥控器给摔了。

(王さんは怒るなりリモコンを投げつけた。)

(42) [?]小王一生气就故意把遥控器给摔了。

加えて上記(22)だが、“他回头一看,心就乱了”が成立するのは、事態ABの主語が異なり、事態Bは事態Aとは別個の<変化>事態を表しているため、事態全体中心の捉え方となり、“一A就B”が成立していると考えられる。

4.1.2 主語が異なるタイプ

事実界既実現の事態を表す“一A就B”は、話し手にとって「事態Aが生起すると(すぐに)事態Bが生起した」という既実現事態の<継起>を表し、話し手が事態Aに関連して注目する事態Bを事態Aに結びつける形式であることを見た。これは、主語が不同で別個の二つの事態の継起においても同様である。

(43) 张燕生买烟回来,一进门电话铃就响了。

(張燕生が煙草を買って戻ってくると、入口を入ったところで電話のベルが鳴った。)

[島津 2011:202]

(44) 上岸时候,天已大亮,景象和黑夜中作出的猜测不同,他以为能见到簇新的树叶和路上的青草,新鲜的果浆的气味随风而至。事实

相反，他一上岸，落叶就挂满了他的袍子。 [聒噪者说：北村]
(岸に上がる時には空はすっかり明るくなっていて、景色は真っ暗な夜中に予想していたのとは違っていた。彼は芽吹いたばかりの木の葉と道端の青い草が見え、新鮮な果実の香りが風に漂ってくるのではないかと思っていた。だが事実は反対で、岸に上がると落ち葉が彼の長衣いっぱい降りかかったのだった。)

(43) は「入口を入る」と「電話が鳴った」という意味だが、事実として張燕生が入口に入ったとたん電話が鳴ったということがあったとしても、その電話は話し手にとって無関係の電話である可能性もあり得るし、また張燕生が部屋に入ってすぐに生起した事態は電話が鳴ること以外にも複数考えられるが、「電話が鳴った」ことは話し手にとって意味のある出来事とみなされ、二つの事態は結びつけられて、<継起>として“一 A 就 B”を用いて言語化されている。(44) も同様に解釈できる。

続いて、事態 A が<契機>を表す例を見る。

(45) 飞机一来，方圆几公里就炸平了。 [看上去很美]
(飛行機が飛んでくると、何平方キロメートルか爆撃されて更地となってしまった。)

(46) 空袭警报一响他便急躁得不行，我母亲说她只好俯在他耳边，反复告诉他日本人没那么多炸弹，要扔只扔在城里。 [灵山：高行健]
(空襲警報が鳴ると祖父は焦ってたまらず、母は、祖父の耳元にかがんで、日本人はそんなに多くの爆弾を落とさないから、落とすなら街中だけに落とすよと繰り返すしかなかった、と言った。)

両例は、“一 A 就 B”を用いて二つの相互に独立した事態が話し手にとって相前後して生起し、「ある状態になった」のだと述べることによって、表現効果として時間的に前にある事態 A には<契機>の意味合いが生じており、二つの事態が関連づけられて理解される。

4.2 現実領域における用法——事実界<習慣・傾向>

現実領域事実界における個別具体的な一回の既実現の<継起>を表す事態が反復して出現するという経験を積み重ねていくと、次第にそれがある一つの必然的なパターンとして話し手の知識の内に定着し、それを述べる用法である。「事態 A が生起すると（いつも）事態 B が生起する」という、ある対象についての<習慣>や<傾向>を表す。

(47) 小王一吃芒果就过敏。

(王さんはマンゴーを食べるとアレルギーになる。)

(48) 北京一到春天就刮风。

(北京は春になると風が吹く。)

(47) は、王さんについて「マンゴーを食べる」という事態が生起するといつも「アレルギーになる」という事態が生起するという意味である。この二つの事態の結びつきが複数回観察されそれを一般化して述べると、継起事態として叙述されている内容が、王さんの<習慣>を意味するようになる。(48) は、北京について「春になる」といつも「風が吹く」という一つの<傾向>を表している。

次の例文の比較から、本用法が既実現事態の<継起>を基盤としているということが見て取れる。

(49) 小王有了钱就买酒喝。

(王さんは金ができたら酒を買って飲む。)

(50) 小王一有钱就买酒喝。

(王さんは金ができるといつも酒を買って飲む。)

いずれの例も最終的には王さんの習性を表現してはいるのだが、(49) は王さんは「金ができる」という事態が実現すれば、どうするかという「酒を買って飲む」という条件関係を表し、次の (51) のように“如果”と共に起して仮定条件文を作ることができるが、(50) は王さんについて「金ができる」といつも酒を買って飲む」という二つの事態の結びつきを表現し、

(52) のように“如果”と共起することはできない¹¹⁾。

(51) 他如果有了钱，就会买酒喝。

(彼はもし金ができれば、酒を買って飲むだろう。)

(52) *他如果一有钱，就会买酒喝。

以下に本用法の用例を補充しておく。(53) は<習慣>の例、(54) は<傾向>の例である。

(53) 一些同学如此习惯站着，一到语文课就自动站起来。

[看上去很美]

(何人かのクラスの仲間はこんなふうに立ったままではいるのに慣れているので、国語の授業になるといつも自動的に立ってしまう。)

(54) 我原说不要你们进学堂的，现在的子弟一进学堂就学坏了。[家]

(もともとお前たちは学校に入るなど言っただろう。今の若者は学校に入るとだめになるからな。)

4.3 非現実領域における用法——観念世界<条件>

本用法は、非現実領域観念世界における<継起>を表す事態を述べる用法である。この場合、「事態 A が生起したら事態 B が生起する」という<条件>を表す。

(55) “老大爷，您可别动了，这是消了毒的，一碰就脏了！”

[人到中年：谥容]

(「すみません、動かないでください、これはもう消毒済みですから、触れたら汚れてしまいます！)」

(56) 我想象自己一睡过去就从这个世界消失，只要能不再见眼前的景象，什么都愿意。

[看上去很美]

(自分は寝てしまえばこの世界から消えるのだと想像した、この目の前の光景を再び見ることさえなければ、何だっていい。)

(55) は「触れる」という事態が生起すると「汚れる」という事態が生起するという＜継起＞を表すと同時に、事態 A に＜条件＞の意味合いが感じられる。(56) についても同様で、「寝てしまう」という事態が生起すると「この世界から消える」という事態が生起するという＜継起＞と同時に、やはり事態 A に＜条件＞の意味合いが感じられる。“一 A 就 B”の表す二つの事態の時間的な前後関係は、非現実領域観念世界における事態の叙述に用いられると、非現実領域は時間軸を持たないことから論理上の前後関係に読み替えられ¹²⁾、さらに二つの事態の位置関係が近接しているということを以って両者が関連づけられれば、副次的に＜条件＞の意味が生じてくる。ただし、一般に条件関係とは上述の＜条件＞の定義にもあるように所謂假定条件と呼ばれるものであるが、本用法は“如果 A 就 B”などが表す典型的な假定条件とは異なる。＜假定＞とは、事実とは関係なしに推論上仮にそうだとすることであるが、本用法における“一 A”は、頭の中での仮想の話ではなく、今はまだ実現していないが事実もしくは場面との関連で時間が経過すれば生起する蓋然性が高い事態を表している。(55) は、看護師がおとなしくしていない手術台上の患者に対し、ややもすれば動いてしまい上にかけた消毒済みの手術用カバーが汚れてしまうということを恐れて、「触れたら」と述べている文であり、全くの仮想で「もし触れるということがあるとするならば」という話ではない。非現実領域の叙述とはいえ、やはり背後には場面における話し手の観察に基づく事態 AB の結びつきという動機づけが働いており、既実現の事態ではないが、現実の場面と密接にかかわりのある話し手にとっての継起事態を叙述しているのである。

続いて次の (57) (58) は、現実領域の＜習慣＞＜傾向＞を表す継起事態が基底に存在して、それを非現実領域観念世界で用いることによって事態 AB 間の条件関係が成立している例である。

(57) 家里不锁门。铜钥匙就插在门外的钥匙孔里，不管谁进门一拧就

行。平时关着主要是怕风吹开。 [看上去很美]

(家に鍵はかけていない。銅の鍵はドアの外の鍵穴にさしてあって、誰でもひねったら入れる。普段閉めているのは主に風で開いてしまうのが嫌だからだ。)

(58) 你那封信里写着“我回来了”，回来就回来了。我当然知道是你写来的信，一看笔迹就知道。 [有只鸽子叫红唇儿]

(あなたの手紙には「帰ってきたよ」と書いてありました。帰ってきたのならそれでいい。私はもちろんあなたが書いた手紙だということは分かっています、筆跡を見たら分かるわ。)

(57) は、家のドアには鍵をかけていないため「ひねるといつも開く」という常態に基づいて、誰でも「ひねったら開く」と述べている。(58) は、相手の筆跡は知っているから「見るといつもわかる」という傾向に基づいて、その手紙も「見たらわかる」と述べているのである。

このように“一 A 就 B”は<仮定>を表すものではないため、次の(59)のような「もし彼が行くのであれば」という仮の想定に対してどうかという「私は行かない」という判断を示すという意味を、“一 A 就 B”を用いて表すことはできない。

(59) 如果他去，我就不去。(もし彼が行くなら、私は行かない。)

(60) *他一去，我就不去。

本用法では、次の例のように事態 B には非現実領域を表す“会、能、可以”などの助動詞がしばしば見られる。

(61) 我很想向觉慧要来那张报纸细细地读，可是不晓得为什么缘故，我终于不敢开口。我害怕我一开口，你们就会知道我的秘密，会责备我，不理我。 [家]

(觉慧にその新聞をもらってじっくり読みたかったけど、なぜかわからないがついに口を開くことができなかった。欲しいと言ったら君たちが僕の秘密を知ってしまい、僕を責めて、無視するか

もしれないと恐れていたんだよ。)

(62) 月光从上面直照下来。人一抬头就可以望见清明的蓝空。 [家]

(月明かりが上からまっすぐに照らしていた。頭を上げれば明るく清らかな藍色の空を望むことができた。)

ただし、“想”など個体を中心とした事態把握に傾く動作者の<意志>や<願望>その他を表すものは、上記(29)で述べたように、その本来の意味では使用しにくい。

(63) 我一回家就想睡觉。(私は家に帰るといつも眠たくなる。)

(63)は「私は家に帰るといつも眠たくなる」という<習慣>の意味でのみ成立し、たとえもうすぐ家に帰るという状況下にあったとしても、“想”を<願望>の意味に解し、「私は家に帰ったら寝たい」という<条件>の意味で読むことはできない。この場合、“想”は“一A就B”においては自身の持つ語彙の意味ではなく、“一A就B”の構文の意味に則した意味に読まれるのである。

“一A就B”が純粹な仮定条件に用いることができないのは、“一A就B”が事態Aの生起を成立の前提とし、話し手の観察に基づく事態ABの結びつきを述べる文であるため、場面から離れた、事態Aについて生起するか否かは問わない仮想の内容についての観念的な仮定条件表現には使いきらいからである。当然ながら、“一A就B”は反実仮想の意味でも用いることはできない。邢福义 2001:522は、“一A就B”が条件関係を表す場合には“只要”を付加でき、なかでも仮定関係を強調したければ“如果”または“要是”を付加すればよいと述べるが、これらの形は“只要A就B”や“如果A就B”の前件に“一A”が用いられた形、つまり“一A就B”ではないと見るべきで、“一A”が<仮定>を表していないからこそ意味的に重複しない“只要”や“如果”などと共起できると考えるのが妥当であろう。

“一A就B”の本用法は<条件>を表すとはいえ仮想の叙述に用いるこ

とはできず、根底にはやはり話し手の観察に基づく「事態 A が生起すると事態 B が生起する」という〈継起〉の意味が存在している。〈継起〉という構文スキーマを、その意味的性質から仮定条件には使用しにくい、時間軸に定位しないという特徴を生かして、事実や場面とのかかわりで生起する蓋然性が高い事態に限って活用していると考えられる。

4.4 現実領域における派生用法

次の例は、“一 A”が共通して“一看”の形で、事態 A の主語は“一看”という動作の動作者ではなく、また事態 B は当該主語の表す対象についての外観や様子を描写するものである。

(64) 我身边一个歪戴白帽子一看就有点不正经的男售货员突然振臂高呼：向翠微中学的红卫兵战友致敬！ [看上去很美]

（自分の傍にいたる白い帽子を斜めにかぶって見るからに少しチャチャした男の店員が突然手を高く上げて大声で叫んだ。「翠微中学の紅衛兵の戦友に向かって敬礼！」）

(65) “是个很不错的小伙子，一看就让人感到亲切。” [CCL 语料库]（「なかなかいいヤツ、見るからに親切そうで。」）

“一看”という動作の動作者は、文には表れていない観察者としての話し手である。しかし“我”を補って加えることはできないことから、この“一看”はある程度文法化した成分と見ることができる。事態 B には、事態全体を中心とした事態把握におけるゼロ化された話し手（池上 2007）の視点から当該主語の表す対象についての主観的な描写、評価などが表現される¹³⁾。“一 A 就 B”は話し手の視点からの話し手の観察に基づく叙述であると考えることによって、このような派生的な用法も上手く説明することができる。

4.5 “一 A 就 B”の構文的意味と各用法における表現的意味

以上、各用法に通底して見られるのは「事態 A が生起すると事態 B が生起する」という事態 A と事態 B の時間的な前後関係および話し手にとっての二つの事態の時間的位置の近接を表す<継起>の意味である。これは、事態 A と話し手にとって意味のあると捉えられた事態 B を結びつける、あるいは関連づけるという話し手による認知的営みによって動機づけられた形式である。このような構文的意味を持つ“一 A 就 B”が現実領域で用いられれば、「事態 A が生起すると（すぐに）事態 B が生起した」という既実現事態の<継起>や「事態 A が生起すると（いつも）事態 B が生起する」という<習慣・傾向>を、非現実領域で用いられれば「事態 A が生起したら事態 B が生起する」という<条件>の意味を副次的に表すことができるというわけである。

“一 A 就 B”が表す、既実現事態の<継起>、<習慣・傾向>、<条件>という意味は、“一 A 就 B”という形式自身が持つ個別の意味（邢福义 2001、李宇明 2000）ではなく、また時間的な意味が内在的関連性へと意味拡張した（島津 2004、王弘宇 2001）というものでもない。“一 A 就 B”という形式そのものはいずれの用法でも<継起>という意味しか表していない。この<継起>という構文的意味を基盤として、現実領域の事態を述べるのか、非現実領域の事態を述べるのかという用法の違いによって、文のもつ表現効果が異なるということなのである。

島津論文において議論されてきた「内在的関連性」の内実とは、事態 A と事態 B の生起が話し手によって結びつけられていることから生じる関連性である。それが具体的に用いられることによって時間的に限定され、事態 A と事態 B の生起が、既実現事態の<継起>用法では「すぐに」という時間軸上の結びつき、<習慣・傾向>用法では「いつも」という常態的結びつき、<条件>用法では「A したら B」という条件的結びつきという関連性を持って意味づけられるのである。

5. おわりに

“一 A 就 B”はなぜこのような多様な用法を持つのだろうか。それは、島津 2004 が指摘するように、“一 A 就 B”は「二つの事態の相互関係に着目する」のみで、時間軸からは完全に開放されているからである。“一 A 就 B”が時間軸から解放されているというのは、“一 A”の性質に基づく。“一 A 就 B”の成立は事態 A の生起を前提としているが、事態 A はたとえ現実領域における既実現の事態であっても、“了”や“着”などのアスペクト表示を必要とせず、A は動詞（句）のはだかの形で現れるのが無標であり、また“*他一到了。”のように“了”と共起して単独で述語として成立することもないのであれば、“一 A”は本質的に動詞（句）が文において最も典型的に機能する述語として成立するために必要な時間的限定をしない非自足的な成分であり¹⁴⁾、認知言語学でいうグラウンディングがなされない形式であると考えてよいだろう。このような“一 A”の時間的に限定されないという性質が、現実領域と非現実領域という二つの異なる用法を可能にしたと思われる¹⁵⁾。また、邢福义 2001:266 が指摘した“一 A 就 B”を基本形式とし、“一”の前に“刚、从、这么、只要”などの語を付加する合成形式があるのも、“一 A 就 B”が時間軸から解放されていることから生じる現象と説明できる。“一 A 就 B”は時間軸から解放されているからこそ、構文スキーマとなって言語環境に応じて多様な用法と意味を持つのである。

“一 A”のこのような性質は、“一”による。述詞の前に置かれた“一”について、島津 2011 は事象の「個別化機能」を担い「事柄の存在を主張するものであり、「事柄の生起」を意味する」と指摘し、本稿も同意するところであるが、ただ、「已然の時間領域に属する」（同 :206）、「事柄の非存在から事柄の存在への変化を捉えたもの」（同 :203）という説明には、些か考える余地が残されているのではないだろうか。“一 A 就 B”は時間

軸に定位しない形式であるならば、“一”の意味を<已然>や<変化>という時間軸を想定する概念を用いて説明することは適さないと思われる。“一A”がアスペクト助詞“了”や“着”、あるいは開始相を表す“起来”と共に起するのは、“一A”が已然の事態を表すためそれに矛盾しない(同:207)からではなく、“一A”が時間性とは無関係でAのアスペクト的な側面は問わないからであって、“一”が“了”などとは異なり、副詞として述詞の前という文法位置において機能するというこも、この意味の表れであると思われる。

“一A就B”の“就”の意味機能は、非自足的で文としては不安定である“一A”と呼応して、事態Aと事態Bを主観的に結びつけることと推測できるが、紙幅の制限から本稿では議論を深める余地がなく、別稿に譲る。

注

- 1) 島津氏による複文研究には、別に“等A, B”を論じた島津2002、島津2003、島津2013b、島津2014がある。
- 2) 複数の先行研究が当該“一”をアスペクト標識とみなしてきたことについての詳細は、島津2011:195-197を参照されたい。
- 3) 王弘宇2001:138に、談話における個々の文の連結の順序には規則があり、“一A就B”が用いられる場合には、判断部分が前で例証部分が後ろに置かれ、“一A就B”はその例証部分に用いられ、前述の判断に対し具体的な説明をするとの指摘がある。
- 4) 現実領域とは「事実界既実現の領域」、非現実領域とは「事実界未実現の領域または未確認の領域であったり、(推理推論上の事態やものの道理の事態など)観念世界の領域」(『日本語文法事典』:627)をいう。
- 5) 邢福义2001:519-523は、“一A就B”の表す意味を<継起><条件><因果>の3つに分け、<継起>は確定した一回の事態で、前節は動作行為を後節は引き続いて生じた別の動作行為を表し節間には単純な前後関係があるだけのものと、前節は動作行為を後節はそれと関連する状況変化を表すものがあるとい

う。〈条件〉は“只要…就…”に相当し、非確定性、非一回性の事態で、節間には前後関係の他假定条件関係があるという。〈因果〉は“由于/因为…（所以）就…”に相当し、節間には前後関係の他に明確な因果関係があり、前節は後節に対し使役性を持つという。李宇明 2000:186/194 は、“一 A 就 B”を已然で継起関係を表す「時間類」と未然で假定条件関係を表す「条件類」（「假定」と「常態」）に分け、“只要”を付加できれば「条件類」、できなければ「時間類」とした。また王弘宇 2001:134-135 は、“一 A 就 B”を基本義としての継起関係（確定した一回性事態）および派生義としての条件関係に分類し、後者をさらに一回的な場合と規則的な場合に分けた。加えて、派生による特殊形式として「動作-程度」関係があると述べた。

- 6) 個体を中心とした捉え方、事態全体を中心とした捉え方については、池上 1981 を参照されたい。
- 7) 島津 2004:140 は本例を事態 B が出来事と捉えにくいという理由から「意味拡張型」に分類するが、本稿は話し手によって観察された「事態」と捉え、意味拡張の結果とは考えない。
- 8) 李宇明 2000:192 は、“一进门就想告诉你”（ドアを入った時からあなたに言おうと思っていた）の事態 B は已然を表すと指摘し、“想、打算、准备”などの語はこのような特殊性を持つという。本稿は、これは“一 A 就 B”の構文的意味の影響によると考える。(29) の“想”と同じことが、(31) の事態 B に用いられた“能”についても言える。
- 9) 李宇明 2000:188 に「VP₂（本稿でいう「B」）は表現の重点であり、表現の内容は一般的に VP₁（本稿でいう「A」）より多い」との指摘がある。
- 10) (21) は元は王弘宇 2001 で議論された例である。同文は、“一 A 就 B”は事態 A 生起後、背後にある隠れた通常あるべき中間項 B を飛び越えて事態 C が生起した（“一上船（未经中间阶段）就把你的药扔海里去了。”（船に乗ると（中間段階を経ずに）すぐにあなたの薬を海へ投げた。））という意味であると主張した。それに基づき、(21) は事態 AC は緊密に生起しているとはいえ、間に想定できる中間項 B がないので成立しないと説明した。
- 11) 李宇明 2000:190-191 は、“了”のつかない“一 A”は“A 了”に変換できるが、変換後は事態 AB 間の緊密性は弱まると指摘する。
- 12) 李宇明 2000:189 は、「条件類」の“就”は時間上の緊密性を表すと同時に論理上の緊密性も表す、というのは条件と結果は論理上の前後関係でありかつ時間

上の前後関係でもあるからと説明する。

- 13) 島津 2006:114 に、“一 A”が“一看”となる“一 A 就 B”は、主体が話し手でかつ事態 B が観察者としての話し手による叙述となるという指摘がある。
- 14) 李宇明 2000:168 は、“一 A”は非自足的で多くの“一 A”が後続成分を必要とするという。
- 15) “剛 A”は、“他刚到。”のように単独で述語を構成できることから、時間的に限定されていると考えられる。このような“一”と“剛”の時間性の相違が、“一 A 就 B”と“剛 A 就 B”の構文的意味の違い、および用法が現実領域から非現実領域にまで広がるか否かという点に大きく関与していると思われる。

参考文献

- 島津幸子 2014 「“等 A, B”句式里“等”的语法化」『中国語文法研究』2014 年巻。
- 李宇明 2000 『汉语量范畴研究』华中师范大学出版社。
- 吕叔湘主编 2002 『现代汉语八百词』商务印书馆。(吕叔湘主编 1980 からの改訂版)
- 王弘宇 2001 「说“一 A 就 C”」『中国语文』第 2 期。
- 邢福义 2001 『汉语复句研究』商务印书馆。
- 池上嘉彦 1981 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店。
- 池上嘉彦 2007 『日本語と日本語論』ちくま学芸文庫 筑摩書房。
- 島津幸子 2002 「時間を表すフレーズを構成する前置詞“等”と“当”について」『中国語学』第 249 号。
- 島津幸子 2003 「イメージスキーマからとらえた“等”の文法化」『お茶の水女子大学中国文学会報』第 22 号。
- 島津幸子 2004 「“一 A 就 B”形式と“剛 A 就 B”形式」『中国語学』第 251 号。
- 島津幸子 2006 「“一 A 就 B”形式の構文の意味」『お茶の水女子大学中国文学会報』第 25 号。
- 島津幸子 2011 「動詞に前置される“一”の文法機能と意味」『中国語学』第 258 号。
- 島津幸子 2013a 「“一 A 就 B”構文の非プロトタイプの意味」『立命館法学』別冊「竹治進教授退職記念論集ことばとそのひろがり (5)」。
- 島津幸子 2013b 「“等 A, B”構文における“等”の文法化」『木村英樹教授還暦記念中国語文法論叢』白帝社。
- 『日本語文法事典』日本語文法学会編 2014 年 大修館書店。